
私は普通の人間だ。

不協和音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私は普通の人間だ。

【Nコード】

N4887X

【作者名】

不協和音

【あらすじ】

私は普通の人間だ。

たとえば幽霊が見えたとしても…

私は普通だ。

私はいたって普通の人間だ。

親兄弟は普通で、父はサラリーマン母は専業主婦、兄は私と同じ高校に通っているいたって普通の高校生だ。

私は普通だ！

たとえば幽霊が見えたとしても…

なにしろ私の成績は中の中だし、容姿だって普通、性格も多分普通だ。

幽霊が見えたり触れたり喋ったり出来る事を除けばいたって普通の女子高生なんだ。

だから私は今までこの事を隠してきた。

いまだに親にだってバレてないし、これからも隠し通すつもりだ。

つもりだったのに…

どうしてこんな事態になってしまったんだ？

2時間前

やばいよこれは…

こんな所誰かに見られたりしたらアウトだ。

（今日の晩ご飯何だったっけ？）

と、現実逃避しても仕方がない、この状況は変わらない。

早い話、今私は空を飛んでいる。

まあ実際には飛んでいるように見えているんだけど

今から2時間前

学校からの帰り道友人と喋りながら普通に歩いていた。

「鏡子^{きょうし}、明日休みだし遊ぼうよ」

友人の留美^{るみ}が私に言った。

「そうだよ遊ぼうよ鏡子いつも遊んでくれ ないし」

友人その2、香織^{かおり}が拗ねたように言う。

二人が言うように私はあまり遊ばない
というか遊べないのだ。

まあ私がこんなだからだけどね…

「わかったわかったまたこんどね。じゃあね」

笑顔でその場から逃げ出した。

「「そう言っていつも遊んでくれないじゃん！！」」

二人は叫んだ。

今思えば素直に遊んどけば良かったと思うよ。

霧

当然誰も助けに来てくれない事は分かっている。

実は幽霊に連れさらわれるのはこれが初めてじゃない：

高校生になってからは初だけど、小学生の頃は割と頻繁に連れさらわれていた。

（まさか高校生にもなってこんな事になるとは思ってたかった油断していたな…自分）

と自分に怒りを感じた。

が、もう今更後悔しても遅いまだ、誰にも見られていない事を幸運に思っておこう。

——死ね死ね死ね……——

まだ、言っている。

私ははあゝとため息をつき周りをキョロキョロ見回した。

（え！！何あれ？）

てっきりこの男（幽霊）は私を殺すのが目的だと思っていたが、違
ったみたいだ：

私達が向かっているだろう場所に黒い靄もやがかかっている。

例えてみるとすればブラックホールみたいな感じだ。

私はそれに見覚えがあった。

それも嫌な感じに：

声

私が4歳の時にあれと同じ物を見た記憶がある

私が4歳の時は今よりも力（幽霊を見たり触れたり）が強くなかった：

声が聞こえるだけで見たり触れたりする事さえ出来なかった。

4歳の時は、まだ幽霊と生きている人間の違いがわかっていなかった。

当時私は声に悩まされていた、お母さんやお父さん、兄が聞こえていない声が聞こえていたからだ。

両親に声の事を言うと病院に連れられ検査をさせられた。

それ以来私は両親に何も言わなくなった。

“こっちへおいで”

声がした：

「だあれ？」

”こっちへおいで”

声の方に近づいたが、誰もいない。

「どこにいるの？」

”こっちだよこっちへおいで”

声がだんだん大きくなる方に近づく。

声が一番大きくなった場所には黒い靄があった。

「なにこれ」

幼い私はそれに触ってしまった。

違う世界

それに触れた瞬間私の体はその靄に吸い込まれてしまった。

目の前は何も見えない、目を開けていても閉じていても変わらない・

上も下も分からない、自分の体は宙に浮いているような感覚、そんな状態が続いた。

いつ自分の足が地面についたのか、何分、何時間、宙に浮いていたのかは今もう覚えていない。

ただ、すごく怖かった事だけははっきりと覚えている。

気づいたら私は全く知らない場所に来ていて、そこにはお母さんやお父さん知っている人は誰もいない事はなぜか分かっていた。

「ここどこ？ おかあさんおとうさんおにいちゃん」

私は居ないのが分かっていたのにそう叫んでいた。

当然だれも反応しない、たくさん泣いて叫んでも誰も来ない。

私は2時間ほど泣き叫んでいたが、疲れて寝てしまった。

どれだけ寝ていたのかは分からないが、目を覚ますと元の場所になっていた。

別にそこで何かがあったのではないがその後、私は幽霊を見ることや、触ること、会話ができるようになってしまった。

それ

靄は段々と近づいていった。

私はあの靄に触れたくなかった、あれに吸い込まれてまたこの世界に戻ってこれるか分からないからだ。

「いや、離して!!」

私は暴れたが男は離してくれない。

「離して!!」

叫ぶと私の体は急に軽くなった、と同時に急速に空中から落下していく。

(し、死ぬ)

そう思い目をぎゅっと閉じたがいつまで経っても何も起こらない。

私はそろりと目をゆっくりと開けた、そこには見覚えのある光景が広がった。

あの場所だ、私が4歳の頃にきた場所。

まるで違う世界、ビルなどの建築物などは一切建っておらず、荒れ果てた大地精気のない木々、。

川は紅く染まっていて血なまぐさい臭いが鼻にツンと来る。

” ドン ドンドン ドンドン ”

空気が震えるほどの轟音が辺り一面に鳴り響いた。

私はその音にすくみあがり近くの岩陰に隠れた。

岩陰から音の主を盗み見た、それは人ではなかった。

私を知る限りあんな生物を見たことない。

それは、人の形をしていた。顔の部分は普通の男性だったが、体は違った無数の人の顔が体から浮き出ている。

手足は細く体ばかりが大きい、全体的な大きさは10mはこえている。

私は悲鳴を上げかけたがぐっと押さえ岩陰に隠れる、音が鳴り止み私は隠れていた岩陰から恐る恐る見た。

「ひっ……」

それは私のすぐ側まで近づいていた……

（気づいてる！！）

私はその場から一目散に逃げ出した。

「はぁ……はぁ……」

息切れ・目眩そんなのはお構いなしに走り続ける。
後ろは振り返りたくない、振り向けない。

” ドン ドン ドン ”

音がし、私は振り返ってしまった。

追ってきている。その顔は満面の笑み、細い手に鋭い爪、捕まったらどうなるかなんて、容易に想像がつく。

私は足にさらに力を込め走り続けた。

婆

なんとか逃げきったようだ・・・

あの化け物は途中で私に飽きたらしく引き返して行ってしまった。

それにしてもここは何処だろう・・・

私は必死で逃げていたためか最初にいた場所が分からなくなってしまった。

周りを必死で見渡してみても人は独りも居ない・・・

あんな化け物にまた遭遇してしまったら今度は逃げきれ自信もない。

「どうしよう・・・私死んじゃうのかなあ」

「それはあんた次第さ」

「だっ・・・誰」

私はそう言い声の方に振り返った。

「人の名前を聞くときはまず自分から名乗ることさね、まああたしやもう人じゃないがね」

声の主は老婆のようだった、見た目は70歳くらいの老婆だが大きさが人とは違った、親指ほどの大きさで見つけるのに少し時間が

掛かったくらいだ。

「ご・ごめんな・さい」

「許してやるよあたしや人が出来てるからねえあつもう人じゃないさね」

どうやら老婆は昔は人だったらしい。

「私は三日月鏡子みかづき きょうこですあなたは？」

「これはご丁寧に、あたしやとめじゃ佐藤とめ、昔は霊媒師として人間界で働いておったわ、今はこの死界でうろついておるがの」

「死界？」

私はとめさんにこの世界のことを聞くことにした。

「ここは人間が天国か地獄に行くまでの狭間の世界死界じゃ。まあここは地獄よりのしかいじゃな」

そんなこともしらないのかと言いたげな様子でとめさんは私に説明してくれた。

死界

とめさんの話は信じられない事だらけだった。

私は確かに幽霊はいると思っていたが幽霊が集まると妖怪になることとか知らなかった。

この死界は臨死体験した人や死んで天国か地獄に行く人がくる場所らしい。

死んだ人は現世でしたことなどで天国か地獄かは決まっておりますそのまま進むが臨死体験者は何処に落ちるか分からない、運悪く地獄よりに来てしまった人はあの化け物に喰われそのまま死んでしまうらしい。

「まさに今のあんただね、それにあんた前にも一度ここに来ただろう」

「なんで知っているのですか！」

驚きのあまり何故か敬語になる。

「見たからね泣き叫ぶあんたを、あんたが4歳くらいの時じゃなかったかねよっばどこに好かれているか好きなんじゃね」

しみじみととめさんは言った。

「好きじゃないですよこんな所！でも、4歳の私はどうやってここから抜け出したのですか？」

私はとめさんを手のひらに乗せとめさんと鼻先が触れるんじゃないかと言うほどちかくで言った。

「ちかいよ！あのとときのあんたは運が良かったんだね、直ぐに元の世界へ帰る扉が開いたのさ今は開く気配さえないね」

「そんなあゝ」

私は落ち込み手のひらに乗せてあったとめさんを落としかけた。

「だから、あぶないよ」

「すみません！！」

私は謝りとめさんを自分の肩に乗せたこれなら落ちないでしょ。

「でも、帰る方法が無いわけじゃない」

とめさんはやりと意味心に笑った。

修行

「帰る方法あるのですか？」

「知りたいかい？」

とめさんは勿体ぶった様子で言う。

「はい!!」

「なら、あたしに付いてきなあたしの厳しい修行に耐えられたら教えてやるよ」

とめさんは挑発的に私に言う。

「耐えて見せます！元の世界に帰れるのならどんな厳しい修行にだった耐えます！」

私は言い切った。

前言撤回します。

厳しすぎでしょうこれは・・・

最初は確かに初心者向けみたいな感じだったが、修行開始1週間すぎた辺りから厳しくなり現在修行開始から3ヶ月位になったのかな？もう数えていないや、になるとオカシい感じになっている。

まず、一番はじめにあったこの死界の化け物をたおせとか意味が分からなかった、結果倒せたから良かったものの倒せなかったら死んでいましたよ。

この世界に住み始めてからだいぶ経つと思うけどここではお腹空いたりのが渴いたり全くしない、それがあるからまだ頑張れているのかもしれない。

他にも色々ありましたここにいる化け物を使役しろとか、気持ち悪いから嫌だったけど仕方なくビジュアル的に一番ましな物を使役しましたよ、とめさんは何故か驚いていたけど。

とにかく死にものぐるいで私はやってきたがそろそろ眼界がそこまで来ていた。

「とめさん、まだ帰る方法教えてくれないのですか？」

私はもう定番の位置、肩に乗っているとめさんに向かって言った。

「そろそろじゃとおもうのじゃがなあ」

「前にも言っていましたよそれ私はもう」

私がいかけとめさんはかぶせるように言った。

「来た来た！鏡子もうかえれるぞ」

「へ？」

私はとめさんが指を指す方向に目をやった、そこにはあの黒い靄があった。

別れ

「待ったかいがあったものじゃな鏡子あの靄に飛び込めそしたら元の世界に帰れるぞ」

とめさんは嬉しそうなでも少し寂しそうな表情で言った。

「はい、今までありがとうございました」

私はとめさんを肩から手のひらに移し変えそのまま深々とお辞儀をした。

「そんな物は気にしなくて良いわ、それからこれはあたしからのせんべつじゃ」

そう言うのとめさんは私に自分の力を送り込んだ、凄く暖かい力だった。

「早くいけ！早くしないと閉じてしまうからのう」

そう言うのとめさんは私の手のひらから飛ぶ降りた。

「ありがとうございました！師匠」

私は泣きながらその靄には入っていった。

「師匠とな、久しぶりにいわれたわい最後の弟子があのでよかったわこれからあのこは色々な事に巻き込まれるじやろうがあたしの力が役立てばよいのじやが」

そう言い終わると同時にとめの体は徐々に消えていく。

「もう迎えの時間か早いものじやのうまああの子に会えたのじやから長生きはするものじやった、・・・もう死んでおったな」

とめはその言葉を最後に消えていった。

” ドスッ ”

「・・・ここ何処？」

辺りを見回すと見覚えのある場所だった、ここは始めに男の幽霊にあった場所だった。

「やった〜帰れた〜」

思わずガッツポーズをしてしまう。

「あの〜どいてくれませんか？」

声が私の下から聞こえてきた。

そういえば落ちたはずなのに痛くなかった。

私は下を見た。

「げっ!!」

そこにはうつ伏せになった男子生徒がいた、私はその場に固まってしまった。

家

どうしよう私はこの場をどう誤魔化そうか必死に考えていた。

「あの、どいてくれませんか？」

男子生徒はもう一度大きな声で言った。

「は、はいすみません。直ぐにどきます」

私は急いでどいた。

男子生徒は起きあがり、不思議そうな目で私を見た。

「どこからきたのですか？」

「さあ？ 私にもさっぱりです」

満面の笑みで誤魔化する。

「空から降ってきましたよね？」

「そういうことになりますね」

「・・・」

「・・・」

男子生徒は怪しげな眼差しで私を見る。

「それじゃあ、私はこれで」

私はその眼差しに耐えきれなくなり逃げた。

男子生徒は私を追いかたが、直ぐに見失ったようだ。

私は死界で化け物どもと戦いを繰り返していた、あんな普通の男子生徒に捕まるはずはない。

「ふう〜着いた」

私は男子生徒から逃げきり、自分の家に3ヶ月ぶりに帰ってきた。

「ただいま」

家には鍵がかかってあり、鍵を持っていなかった私はノックをしなから言った。

”ガチャ”

ドアが開いた。

（えっこの人誰？）

ドアを開けた人は全く知らない人だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4887x/>

私は普通の人間だ。

2011年12月16日20時47分発行